

IV 研究開発の記録と検証

1 各教科・科目における地域協働カリキュラム

(1) 長期ループリック

●目的・目標

各教科の長期ループリックを基に、各単元における7つのチカラとの関連を記載した各教科・科目のシラバスを再検討するとともに、7つのチカラ育成の卒業時までの計画を学校全体で共通理解し、実践する。

●内容

本稿は本来、「長期ループリック」に関して、前述の目的・目標に照らし検証するものである。しかし「7つのチカラ育成の卒業時までの計画を学校全体で共通理解し、実践する」段階までは到達できなかった。ただし、成果が徐々に表れてきていることは事実であるため、ここでは、取組の概要として今年度の授業改善についてまずは述べる。

今年度もコロナ禍における休業措置に対応するためのオンライン学習制度の構築、タブレット端末を生徒に活用させる授業改善、また図書館を利用した授業づくりの研究などに重きを置いた。特に今年度は岡山県教育庁より「一人一台端末活用推進事業校」の指定を受け、AI教材（外国語科・数学科）を使用した個別最適化を図る取組など、端末使用における研究を深めていった。

今年度の授業改善は「ICT（端末）を用いて学習への積極的な姿勢を育む」を目標に取り組むこととなった。昨年度はオンライン学習元年とも言え、研究開発室を中心に各教員が手探りで端末を生徒に使用させる授業を展開していったが、今年度は授業の終盤にある「振り返り」活動に対して Google フォームを軸としたアプリを使った振り返りを全教員に求めた。つまり、「振り返り」から逆算した授業づくりを各教員が実施することとなった。その他にも例年から引き継いだ取組や新たな取組がある。

本校の授業の「額縁」として、次の（ア）、（イ）の二点を年度初めに確認した。

（ア）「本時の目標」「学習の手順」に加え「達成基準」の提示。

（イ）「振り返り」の機会を必ず設け、生徒自身が Google フォームなどのアプリで学習に対する到達の評価や定着具合を確認できるようにする。それまでの授業の感想だけを入力する形ではなく、授業目標に対する定着を図れる（生徒の現状把握と記憶の定着）ものとする。

また、昨年度に引き続き今年度も、

（ウ）「生徒の意欲を引き出す、学ぶ値打ちのある探究的なパフォーマンス課題とその評価の実践に取り組む」ことを目指して、その過程に、ICTの活用と共に、学習センター（学

校図書館)を利用し、学習をより深めること。また、評価においては、年度当初に生徒にも配布して共有している長期ルーブリックと関連した単元ルーブリックやパフォーマンス課題を評価するルーブリックを示す。

全教職員で取り組み、その成果について、11月末日をめぐり、実践報告として本校のホームページに掲載する。

(エ) 教科横断型授業への取組。新学習指導要領の改訂を一年後に控え、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう教科横断型授業に学校全体で着手する。

この(ウ)、(エ)の目標に到達するために、毎年11月に実施する研究授業に加えて、職員会議前に約30分前後の教職員研修や3回に渡ってOJT研修を実施した。昨年度は、授業改善の意義や方法について全教職員と共有しきれていない点が課題であったため、今年度は、端末活用や教科横断型授業に絞って研修を実施した。

以下はその実際である。

[職員会議前・OJT研修等、授業改善のための校内研修]

○4月3日 新任者オリエンテーションで、前述の(ア)(イ)(ウ)について、共有した。

○端末活用研修・職員会議前(4月・5月・6月・8月・12月)

○今年度の授業実践報告を活用し、情報共有(1月)

○OJT研修(教科横断型授業の取組)(5月・7月・10月)

[研究授業および研究協議の実施(一人一台端末活用推進事業成果報告会含む)](11月)

これについては、p32~の「(2)学力向上に関する研究協議会」として記載する。

●検証(取組による成果と課題)

・授業工夫アンケートの結果から

①昨年度は、授業規律の向上が課題であったが、今年度は、授業中における生徒の変容の項目で、75.9%が「よくなった」と回答し、多くの教員が「手ごたえ」を感じている。この点が今年度第一の成果として挙げられる。その判断の根拠として、端末を活用して、「振り返りやまとめの入力に取り組む」生徒の様子が挙げられていた。また「授業内容をより日常生活に視点をおいた」ため、一層生徒が意欲的に取り組める要因になったという意見もあった。

一方、24.1%が「変わらない」と回答し、その理由として、授業内容による学習意欲のばらつきや、学習の成果が外部模試の成績にまで反映されているとはいえない点があがってはいたが、授業規律については問題ないとする意見もあったことを考えると、前述の授業規律の向上に関しては大半の教員の同意があったといえる。

このことから、生徒が落ち着いて学びを進めていける環境が整えられたといえよう。ちなみに、学年ごとに実施した生徒対象のアンケートでも、学年によるばらつきはあるもの

の、7割から8割の生徒が、「よくなった」と感じており、教職員の回答と呼応している。

②「授業の額縁」(ア)の「目標」と「手順」の提示や、(ウ)のパフォーマンス課題の実践に関しては、ほぼ全員が実施している。さらに、教科横断型の授業実践に関しても、「実践した」が7割以上となり、昨年度の3割から劇的な増加となっている。また、「目標」と「手順」の提示することの手応えや意義が実感できていると答える教員は昨年度の半数弱から、6割弱と微増している。前述した、教職員の学び合いの機会を意識的に行ったことが奏功している。

③(イ)「振り返り」に関しては、実践する教職員は8割弱から9割強、ルーブリックによる評価を実践する教職員は7割から8割と、いずれも増加した。さらに、各教科が提示した長期ルーブリックに関連した評価を行う教職員も3割から増加したとはいえ6割弱にとどまっている。ひきつづき、毎時間の振り返りが、教科の学習全体のどこに位置づけられているのかを、生徒と共有し授業を進めていく取組の意義の強化と推進が求められる。

④「長期ルーブリック」そのものを生徒に活用させる点については、8%から3%とさらに減っており、効果的な活用ができているとはいえない現状である。

・長期ルーブリックに関連した単元ルーブリックを実践する教員は、3割から6割に増加した。この他、今年度の授業改善の取組を実践した教員、また、その意義を実感する教員の数も昨年度よりも増加している。また、その取組の成果について生徒自身も同様に感じていることがアンケートからいえる。「生徒と教職員が協力してよい授業を創る」学校風土が根付いてきていることは成果といえる。

・今年度本校が卒業までに生徒に身に付けさせたい力をスクール・ポリシーとして提示し、その力を、日々の教育活動である授業の中でどう達成していくのか、そのことを、道しるべとして示したものが、各教科が作成する長期ルーブリックである。ゆえに、教職員のみならず、やがては生徒にも共有されるよう、現行のものを改善し、その活用の在り方を模索していかなければならない。

(2) 学力向上に関する研究協議会

●目的・目標

学力向上に関する研究協議会を公開する。

●内容

今年度は、学力向上に関する研究協議会として11月に公開授業と研究協議を実施した。その具体は以下のとおりである。

研究授業および研究協議（一人一台端末活用推進事業成果報告会含む）

11月18日（木）

参加者：校外参加者10名、校内参加者

家庭科 1年2組「家庭基礎」 授業者：西田 幸美

社会科 2年3組「日本史B」 授業者：山本 裕稀

指導講評 一人一台端末活用推進事業アドバイザー 三浦 隆志 氏

家庭科では、家族の献立を考えるという授業において Google スプレッドシートを献立表に見立て、入力させることを試みた。日本史Bでは、中世の流通に着目し、なぜ流通が広まっていったかを端末を利用して協働学習を行い、理解を深めさせた。ともに家庭学習を事前に行わせてから授業に臨むスタイルで端末を最大限に利用させた授業であった。

研究協議の冒頭において、県指定の事業でもある一人一台端末活用推進事業の成果報告を行い、AI教材の活用、家庭学習と授業のつなぎ方を重点に取組と成果について話した。

その後、八つの班に分かれて、二つの授業と今後の端末を使用した授業改善について議論を行った。これまでの付箋と模造紙を使用した研究協議ではなく、Google ジャムボードを使って研究授業の振り返りと意見整理、教員の端末活用を浸透させる手立てについて協議し、Google スライドにまとめて、発表・共有した。

「一人一台端末活用推進事業」成果報告発表スライドより抜粋

本校のミッションについて	学年団の結束～風通しの良い職場～
<p>●岡山県「1人1台端末活用推進事業」の指定校</p> <p>【ミッション】 家庭学習の時間を増やし、学力を向上させる (D3ゾーンを減らす)</p> <p>目標：1日平均90分</p> <p>対象：1年次生</p> <p>・学力の向上は、1年後・2年後、長期的に見ていく予定</p>	<p>1：親身なフィードバック</p> <p>①生徒手帳への記入（毎日の家庭学習時間の記録） ⇨教員はコメントをつける</p> <p>②放課後学習支援（週2回の補習）⇨主に英語 ⇨（テスト前は主要科目）</p> <p>③生徒との面談 ⇨（面談週間以外に家庭学習時間の少ない生徒、成績不振の生徒に適宜声掛け）</p>

学年団の結束～風通しの良い職場～

2：授業改善（すべての教科）

① 振り返りの徹底

- ↳ 定着を図るために、授業後半にGoogleフォームなどのアプリを使用するか、家に持ち帰らせる。
- ↳ 振り返りシートは感想文ではない
→その日の振り返りをもって次回の授業に臨む

② 反転授業の実施（予習ありきで授業を進める）

- ↳ 動画等を見てこない授業に乗り遅れる
- ↳ 調べ学習をしてこないと周囲に迷惑がかかる

③ 授業内での生徒に端末を使用させる頻度の増加

端末を使わせる授業では、寝る生徒がいない

入学時の課題テストで比較

・1年次生入学時テストの比較。4月、9月、12月実施



① 4月実施：81名受験
平均点 29.3点

② 9月実施：80名受験
平均点 38.5点

③ 12月実施：80名受験
平均点 42.9点

令和3年度 1年次生 学習実態調査

4月から比較すると倍増の結果

平均時間/1日(クラス別)

	1組	2組	3組	普通科	キャリア	全体
第1回 (4/9~4/15)	55.1	81.2	54.4	66.9	54.4	62.4
第2回 (5/17~5/23)	87.6	85.1	64.5	86.4	64.5	79.5
第3回 (6/24~6/30)	73.7	103.5	65.3	88.6	65.6	80.6
第4回 (10/4~10/10)	113.3	143.1	122.8	128.8	122.8	126.8
第5回 (11/24~11/30)	138.8	145.2	151.4	142.1	151.4	145.2

<まとめ> 授業外の学習を行う動機付けとして

- ① 難易度が高くなく、生きる力の育成を意識した生徒の興味・関心を引く授業内容
- ② 生徒が取り組める適切な課題の指示
- ③ 効果的なタブレット端末の使用やAI教材の導入
★来年度から5教科版Qubenaを導入
- ④ 個人面談を適宜実施し、生徒を主体的に学習に取り組ませるシステムづくり

*⑤ 学年団としての結束力のアピール

● 検証（取組による成果と課題）

前述のとおり、今年度開催できた「学力向上に関する研究協議会」は、一人一台活用端末事業の成果報告という性格を帯びていたため地域協働カリキュラムに関する研究協議はここでは行われなかった。しかし、本校の目指す授業改善が、本校の生徒の学力向上に有効であることを研究協議の場を通じて共有できた点は大きな成果である。

(3) パフォーマンス課題

●目的・目標

p 29～の「(1) 長期ルーブリック」で述べた「目的・目標」に取り組んだ成果として、全員がパフォーマンス課題の実践報告書をホームページにアップする。

●内容

今年度は、教科横断型の学習課題に取り組むとともに、生徒が端末を活用している実感が伝わるために県が示す形式を使用した。その結果、2月末までに28事例を本校のウェブサイト(wakesizu.okayama-c.ed.jp)に挙げる事ができた。

その特徴の顕著なものとして外国語科、家庭科の二例を掲載する。

(別紙様式) 1人1台端末の活用による実践事例

学校名		岡山県立和気岡谷高等学校	
実践者等	浮田 圭一郎	実践日	令和3年9月21日
実践場面 (教科・科目、学校行事等)	外国語科 コミュニケーション英語Ⅰ		
対象生徒(学年等)	1年生		
単元名 (教科・科目の場合のみ)	Lesson 6 奇想天外な浮世絵師 重点文法事項：受身		
使用したアプリ等	Google ジャムボード、Google フォーム、Google スライド等		
実践の概要(ねらい等)	ICTを活用した教科横断型授業。英語の受身と日本語の受身を比較する。両言語の文化背景を知り、学びを深める。後日、国語総合(単元：水の東西)でも別視点から受身を取り扱う。		
実践の内容			
(1) 本時目標の確認「受身表現を通して、英語と日本語とのモノの見方の違いを考えてみる」 ・英語と日本語(古文を含む)を比較することで、批判的思考力を育成する。			
(2) 受動態「犯人は警察に捕まえられた」と能動態「警察は犯人を捕まえた」の2つの例文に対して、Google ジャムボードに生徒にイメージ図を描かせてみる(グループワーク)			
(3) 教員が模範のイメージ図を提示し、なぜ受動態と能動態でそのようなイメージ図になるかを解説する			
(4) イメージ図や例文から日英の能動態と受動態の比較をする ・Google ジャムボードに生徒の例文を比較した際の気づきを付箋で貼ってもらい、グループ独自の見解を出してもらう。(グループワーク)			
(5) 各グループが(4)で出した気づきを発表後、教員が解説を加える ・生徒から様々な意見が出てくる中で、教員から「英語と日本語では認知の順序が逆である」という点を紹介。日本語は「視点(立ち位置)」に重きを置き、英語は「発信源」に依存するために日本語的な受身表現は存在しない点も述べる。			
(6) 最終的な振り返りで新たな気づきなどをを入力する ・Google フォームに教員の意見も参考にしながら記入する。			
(7) 後日、国語総合(現代文)で比較文化論「水の東西」で日本語の受身表現や文化に触れる			
参考となるHP等	本校ホームページ		

実践の様子が分かる写真等を適宜入れてください。(画像様の確認等は各校で行った上で提出してください。)

(別紙様式) 1人1台端末の活用による実践事例

学校名		岡山県立和気岡谷高等学校	
実践者等	西田 幸美 長谷川喜代美	実践日	令和3年7月26日
実践場面	家庭・家庭基礎 国語・国語総合		
対象生徒	普通科1年		
単元名	家庭基礎：衣生活をつくる 国語総合：小論文を書こう		
使用したアプリ等	Google ドキュメント、スプレッドシート、スライド、classroom		
実践の概要	家庭科と国語科の教科横断型授業。持続可能な衣生活(サステナブルファッション)を実現するために現状を調べ、自分が今すぐ取組むべきことを考え、意見文にまとめて発表する。取組むために自分に必要な知識や技能は何かを自覚して、学習に取組めるよう単元導入部分で行った。また、意見文は、国語総合の「小論文(意見文)の書き方」を復習して作成する。情報活用能力・問題発見能力・言語能力の育成を目指す。		
実践の内容			
(1) 目標・手順・達成基準の確認 ○教員説明(スライド：「目標・手順・達成基準」)			
(2) サステナブルファッションへの取組の必要性を理解 ○教員説明(スライド：デジタル教科書・環境省HP参照)			
(3) 調べたことをもとにワークシート(WS)を記入 ○各自がchromebookを使用し、環境省HPで紹介されている企業や行政の取組から気になった取組を3つ記入 ・自分自身が今はできていないがこれからできること、取組もうと思うこと、みんなでやらなければいけないと思うことを3つ記入 ・1つを選び、その根拠説明と根拠データを記入 ○WSは写真を振り、classroomから提出【授業後】			
(4) 意見文を作成・提出 ・国語科教員から意見文書き方について説明を受け、確認 ○classroomから配付したドキュメント(図1)に意見文を作成・提出【課題】			
(5) 本時のまとめと次時の予告 ・意見文の内容・留意点、提出期限を再確認 ・次時はクラスで意見文を発表 ○発表時はclassroomから配付した評価シート(スプレッドシート)(図2)に記入			
参考となるHP等	環境省HP https://www.env.go.jp/policy/sustainable_fashion/		



2 地域協働デュアルシステムカリキュラム

(1) 学校設定教科・科目「地域協働探究」の開講（令和3年度の内容）

本年度より学校設定教科・科目「地域協働探究」を開講し、普通科とキャリア探求科の就職希望の3年次生13人が受講した。火曜7限と金曜5限の2単位の科目であるが、校外での体験活動時には金曜6限の他の授業と火曜7限を入れ替え、連続2時間の授業時間を確保した。

●活動内容

活動名	時期	内容	備考（協力事業所など）
就業体験 （地域の事業所）	5～7 月	地域の事業所へ赴き、就業体験を行った。	・恒次工業株式会社・アイコム株式会社・埜藝菓（チョコレート製造・販売）・和気商工会・和気町役場・BSベーカリー・ハイビスカス（美容院）
就業体験 （校内）	6月	緊急事態宣言の発令を受け校内で就業体験を実施した。	・事務室・図書室・校長室 ・保健室・英語科他
就業体験先 との オンライン交流会	6月	緊急事態宣言期間中、生徒と事業所をオンラインで繋ぎ、Zoomによるミーティングを行った。持続的な交流をはかることを目的とし、近況報告や交互に質問をする時間を設けた。	・恒次工業株式会社・和気商工会・和気町役場
社会人との オンライン対話	9月	地域の企業や役場から社会人を招いてのグループ対話。コロナ禍によりオンラインにて開催した。	・消防士・警察官・放電精密加工研究所職員・コーワン株式会社職員・赤磐市地域おこし協力隊員・晴耕舎（元JICA職員）
就業体験受け入れ 事業所への 学びの報告動画 作成	10月	9月に1学期の就業体験の発表会を予定していたが、コロナ禍の影響で中止。お世話になった事業所への学びの報告として動画を作成した。	

和気駅魅力化プロジェクト	11月～1月	3年間利用した和気駅への恩返しとしての清掃活動や、インスタグラム風の“和気高生のつぶやきポスター”を掲示し、駅の活性化を図った。	・JR 和気駅
--------------	--------	--	---------

●活動の様子



就業体験（地域の事業所）



就業体験（校内）



社会人とのオンライン対話



和気駅プロジェクト（掃除風景）



和気駅魅力化プロジェクト（和気高生のつぶやきポスター掲示）

●振り返り活動

金曜に体験活動を行い、翌週の火曜は振り返りの時間とした。振り返りは4～5人の生徒に教員1名を配置し、対話形式で行った。当初は教員が進行役を務めたが、段階的に生徒自らがファシリテートできるよう問いかけの仕方等を指導した。

就業体験の振り返り（ワークシート）より

- ・初めて経験することがたくさんあって貴重な時間だった。
- ・他のメンバーの話を聞いて、自分の知らないことも知ることができたので、今度は自分から質問を考えて聞くようにしたい。
- ・〇〇君が溶接の仕事は命がけだと言っていたのが印象的だった。
- ・〔校内就業体験〕みんなランダムで振り分けられた場所なのに頑張っていた。前より本（小説）に関心や興味がわいてきた。

社会人とのオンライン対話後の振り返りメモより

- ・初めての人と話すときは、仕事の付き合いと思って頑張ればなんとかなる！
- ・働くとは何か？ただお金をもらうだけでなく、責任感を持って頑張ること。
- ・〔警察官の話〕高校生で一番多い犯罪は運び屋。昔より事件は減っているが18歳になっている許される歳になると事件を起こす人が増える。
- ・商品を使う人たちの感想を聞くことが自分たちの発展に繋がる。

令和3年度最終日、年間を通しての振り返りより

- ・仕事とは働くだけでなく、コミュニケーションをとることが大切。
- ・この「地域協働探究」の授業のおかげで、発表や自分の意見を言うことに抵抗がなくなった。
- ・和気駅プロジェクトで清掃活動をすることで3年間の恩を返せたのがよかった。
- ・学校にいただけではわからない、地域の人々の声を聞くことができた。
- ・就業体験を行うことで自分の向き不向きがわかった。
- ・目上の人（社長など）と話をする機会があるのがよかった。
- ・クラスメイトや教員からの声かけで周りの人々の温かさに気づくことができた。
- ・以前よりも社会人（大人）と上手にコミュニケーションが取れるようになった。
- ・振り返りの時間に他の人が何を考えているのかを知れたのがよかった。それを次の活動に繋げることができた。



最後の授業、振り返りの様子

(2) 令和4年度以降のシラバス・年間計画

本年度の「地域協働探究」は3年次生のみ2単位の科目であったが、来年度からは2年次生は5単位(「地域協働探究α」)、再来年度からは3年次生が6単位(「地域協働探究β」)の科目となる。以下、それらの詳細を述べる。

●目標、ゴール、目的

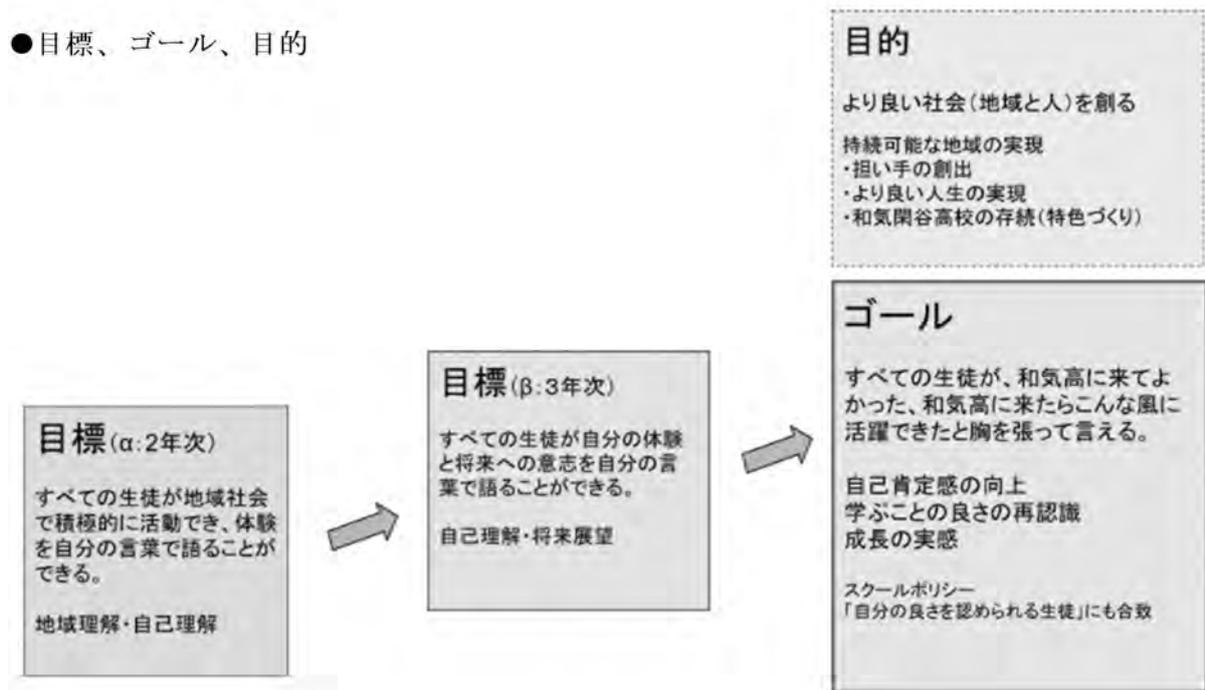


図1

図1は、「地域協働探究α・β」の目標とゴール、その目的を平易な言葉で表したものである。α(2年次)の目標は地域理解と自己理解である。β(3年次)には自己理解に加え将来の展望を自らの言葉で語ることを目標としている。

それらの目標を達成した先にゴール（最終目標）がある。ゴールは自己肯定感の向上、学ぶことの良さの再認識、成長の実感を得ることの3つである。ゴールを果たすことで、上の図に挙げた様々な目的（持続可能な地域の実現等）が達成されると考える。

●つきたい力

「地域協働探究」の科目を通して生徒につきたいのは、「体験を経験に変える力」である。＜生の体験→内省・表現などの振り返り活動→体験が既知の情報や知識と結びつき、自分にとっての意味付けがされる＝経験が変わる＞というプロセスを授業に埋め込むことで力をつけたい。

また、その先には、学習意欲の向上という目的がある。＜体験から学べる実感を持つ→どんなことから学べる実感を持つ→どの授業からも学べる感覚を持つ→学ぼうという意欲が継続する＞というポジティブなサイクルを生み出したい。

●年間計画 ※「ふ」は「振り返り」

	1学期										2学期										3学期																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24														
1限	オリエンテーション 就業体験準備	和気の日	赤磐の日	備前の日	就業体験準備	就業体験① 5日間					スキルアップ講座	就業体験② 5日間					プロジェクトα										自分でデザインデー 当日 準備	発表準備										
2限					インタビュー移住者40人						スキルアップ講座																											
3限					企業訪問① 外国人編						企業訪問② フレッシュマン編						社会人との対話 (3年生が企画)																					
4限					ふ						ふ						ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ			ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
5限					ふ						ふ						ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ			ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ

図 2

	1学期										2学期										3学期															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22														
1限	オリエンテーション 就業体験準備	就業体験③ 10日間										発表準備	発表会	プロジェクトβ										自分でデザインデー 準備	発表準備											
2限																										リハ	会いたいプロジェクト									
3限														発表会																						
4限														ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ			ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
5限														ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ			ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ
6限														ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ			ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ	ふ

図 3

図 2 は、「地域協働探究 α」（2 年次）、図 3 は「地域協働探究 β」（3 年次）の年間計画である。α、βともに基本的には午前中（1～4 限）は校外で活動し、午後（5～6 限）

は学校で振り返り活動を行う。学校外での活動は、「社会に開かれた教育課程」（新学習指導要領）にあるように、地域の人的・物的資源を最大限活用する。

α は、地域での多様な体験やインプットを通して社会への理解を深めると同時に、体験の振り返りを自己理解につなげる。 β は、自己理解をさらに将来の展望へとつなげるべく、生徒自ら企画し実行する単元を増やしている。

●各単元の内容

- ・ α 1 学期：「和気の日」、「赤磐の日」、「備前の日」

本校近隣の市町を巡る見学ツアーである。各市町の職員と本校職員が協働して計画し、各市町が高校生に見てもらいたい場所、会わせたい人を考えて授業デザインを行う。目的を共有した上で、可能な限り地域側が積極的に学校教育に関わってもらうことがこのツアーのねらいである。

- ・ α 2 学期：企業訪問

2～3名のチームを組み、地域の企業を訪問しインタビューをする。技能実習生などの外国人労働者を受け入れている企業や、生徒と世代の近い従業員がいる企業を訪問し対話させたいと考えている。

- ・ α 1・2 学期、 β 1 学期：長期就業体験

α では5日間の就業体験を1学期と2学期の2回、別の事業所で行う。 β では1学期に1つの事業所で10日間の長期実習を行う。1学期に赴く事業所は2年次・3年次共通となるため、3年生が2年生をサポートし、就業内容を引き継ぐことが可能となる。

- ・ α 、 β 2 学期：プロジェクト

2学期に行われるプロジェクトは、総合的な探究の時間（閑谷學）で取り組んでいるプロジェクトの中で、提案で終わっているものの実践や、既存の学校行事の再企画、町のイベントを企画・実践することを予定している。

- ・ α 、 β 2 学期：会いたいプロジェクト（社会人との対話）

地域で働く大人の中から話を聞いてみたい人を選び、アポイントメントを取り、交渉し、対話の機会を設ける。3年次生が企画し2年次生も対話に参加することで、2年次生が3年次生と連携し活動を行い、先輩の背中を見て学べる体制をつくる。

- ・ α 、 β 通年：振り返り活動

対話形式で行う。生徒7～8名と教員1名でチームを組み、教員がファシリテーションを行う。振り返りを深めるためには教員のスキルアップが必須であるため、手法などを教員同士で学び合う時間を設ける。

- ・ α 3 学期、 β 2 学期：自分でデザインデー

午前中4時間を、何のために使うのか、どう使うのかを含めて、生徒自らが設計し実践する。受け身の姿勢でいることの多い生徒が、否応なしに自発的にならざるを得ない時間を設けることで、自由であることの良さやそれに伴う責任に気付かせるのがねらいである。

●教材例

就業体験アンコール 7月9日(金)

名前 _____

めあて 自転車スタンドを完成させる

実習内容 (何をした?)

自転車スタンドを作る

今日一番印象に残っていることは?

みんなが協力して上手に自転車スタンドが作れたこと

それに対して自分はどう感じた?

1人1人が自分のできることを見つけ、協力合うことが大切だと思った。

今日の新発見は? ※初めて知ったこと(知識)でも、自分についての新しい発見でも何でもOK!

工具や市販されているものを上手く使うことで、いろいろなものを作ることができると分かった。

5~7月の4回の実習を振り返って(体験を経験に変えることができたかい?)

今回の商工会での実習は今まで行った企業とは少しちがうかんい
だ、たけど、とてもいい体験をすることができました。

「働く＝サラリーマン」や「工場での仕事」というイメージが弱かっただけで、それ以外
にも今回のように町丁の活性化などを行うことも仕事の1つであるということが
よく分かった。

振り返りシート 9月28日(火)

名前 _____

他のメンバーの体験を共有しよう

_____さん 対話した社会人の名前と職業 滝川さん 故電

(内容・印象に残っていること・発見したこと・今後活かせると思ったことなど)

[印象]
 働き方、家族や誰かのために頑張るということでもあり、
 お金を稼ぐだけでなく、
 Xモは、自分だけでなく今後の人のためにも
 与えるのだと

次の日へつながるのがいいか、働けなくなるのはいいのかを
 今日のことを考えてみたら、次の日の誰かに迷惑がかかると思った。

_____さん 対話した社会人の名前と職業 小林さん 晴耕舎

(内容・印象に残っていること・発見したこと・今後活かせると思ったことなど)

内容
 青年海外協会の海外の所で働いていた。スワリヒリ言語の通訳を教えるも、後は慣れた
 文化は違うけど、小売業だからいい国、国が支援しているところ。

他のメンバーの体験(対話の内容)を聞いて気づいたこと・考えたことは何?

働くとは何か? ただ働いてお金もらうだけでなく、責任感を持って頑張ること。
 しーしーにとらわれすぎないこと。

今後の学生生活や社会人になったときに活かせるようなことは?

Xモを取るときは、大変だったことを改善の仕方もしておくと、次の人に教える時、いい。

アルバイトをあることもいいけど、新しく働くときは「前、働いていたときは〜でした」とかは言わない方がいい。まじまじと答える程度。

●評価基準

本年度の「地域協働探究」（2単位）は、来年度、再来年度に開設される「地域協働探究 $\alpha \cdot \beta$ 」（5・6単位）の助走的、暫定的な科目であること、また、令和4年度より新学習指導要領へ移行し現行の4観点から「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点評価となることを踏まえ、生徒の実態把握に努める一年とすることにした。振り返り活動での言動をはじめとした本年の生徒の実態をもとに、来年度以降の評価の基準となるルーブリックを策定したい。

なお、本年度の評価に関しては、従来の4観点による評価を行った。

観点Ⅰ 【関心・意欲・態度】

体験実習、振り返り活動などの出席状況、就業体験のしおりやワークシートの提出状況など

観点Ⅱ 【思考・判断・表現】

就業体験のしおりやワークシートの内容、就業体験先への学びの報告動画での表現力など

観点Ⅲ 【技能】

体験実習や振り返り活動でのコミュニケーション能力など

観点Ⅳ 【知識・理解】

体験実習を行う上での基本的なマナー、本科目の目標の理解度など

3 総合的な探究の時間における地域協働カリキュラム

(1) 総合的な探究の時間「閑谷學」

●目的・目標

「閑谷学校」の学びの精神を引き継ぎ、地域との関わりを重視しながら、自ら学び、自ら考える姿勢と、問題を解決していく力を身につける。

●育てようとする資質や能力及び態度

①生きて働く知識や技能（何を理解しているか、何ができるか）

○探究の手法（対話・協働の方法、目標設定の方法、論題設定の方法、情報収集の方法、情報整理の方法、論理的に考える方法、発表の方法、振り返りの方法）

②未知の状況にも対応できる思考力や判断力、表現力（理解していること、できることをどう使うか）

○情報活用能力 ○問題発見・解決力 ○表現力

③学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力、人間性（どのように世界・社会と関わりよりよい人生を送るか）

○自己の将来について夢や希望を持って具体的に考えようとする態度

○異なる意見や他者を受け入れ、相互に認め合い、共同して課題解決しようとする態度

○社会を取り巻く様々な事柄に目を向け探究し、自分の言葉で整理しようとする態度

○社会活動に当事者意識を持って参加し、現在および将来の学習に活かそうとする態度

○閑谷学校の精神を継承しようとする姿勢

●3年間の成長イメージ

学年	単元	活動内容	問い	探究サイクル	協働	口頭発表	聞き手として
3	IV 論文作成	・個人探究の内容を、2000字以上の論文にまとめる					
	III 未来探究（個人探究）	・興味関心に基づき、個人で自律的に探究を行う ・フィールドワークや地域で実際に課題解決のための活動をするなど、必ず自分で一次情報を取りに行く ・スライドを使つての発表をする	・「調べて考えてやってみてわかる」問い（仮説）を作ることができる	・自ら探究サイクルを回すことができる	・自ら協力者を見つけ学校外の人と協力して活動することができる	（成果発表） ・メモを持たずに発表することができる ・質疑応答を通して聞き手と対話することができる （中間発表） ・メモを元に発表することができる ・質問に的確に答え、次の計画を立てたり考えを修正したりできる	・発表者の探究の発展に寄与する（本質的かつ具体的な）質問ができる
2	II （グループ）地域探究	・選択したテーマごとに健康・ビジネス・自然科学・歴史文化・教育のいずれかのゼミに所属し、チームで活動する ・探究（問いを立て、実践を通して検証し、まとめ、発表するサイクルを繰り返す）を行う ・情報収集や問い、目標、計画の設定など探究のための技法を学ぶ	「調べて考えてわかる」問い（仮説）を作ることができる	・教員の補助のもと探究サイクルを回すことができる	・学校外の人の付き合い方のマナーを説明できる ・チームの中での役割を理解し、果たすことができる	（成果発表&引継ぎ会） ・原稿を読まずに発表することができる （中間発表） ・原稿を元に、聞き手の顔を見ながら発表ができる	・発表者の探究内容を理解した上で質問することができる ・5W1Hの質問を使い分けることができる
	I 探究基礎	・自分で選んだ事柄について調べ、Wikipediaに記事を書く（対象は2市1町に関わるものごと） ・バスツアーで五感を使って2市1町（備前・赤磐・和気）に触れ、情報を得る ・体験で注目した事柄についてスライドにまとめ、発表する	・「調べてわかる」問いを作ることができる ・「考えてわかる」問いに取り組むことができる	・教員の指示のもと探究サイクルを経験し、理解することができる	・他者の考えと自分の考えを比べながら、理由を明確にして意見を言える ・相手の話を聞き、自分の意見を言うことができる ・話し合つて結論を出すことができる	・質問に答えることができる ・同級生の前で発表することができる	・興味や疑問を元に簡単な質問をすることができる

●内容

	1年次	2年次	3年次
1学期	学校への適応 仲間づくり	単元Ⅱ 地域探究 イントロダクション ※SDGsについて 問いの再設定、仮説→検証 2市1町フィールドワーク 発表準備、リハーサル	単元Ⅲ 未来探究 イントロダクション 問いの再設定、仮説→検証 調査・分析・実践 発表準備、リハーサル
	単元Ⅰ 探究基礎 イントロダクション、2市1町バスツアー ウィキペディア作成、発表準備、リハーサル ※探究手法の習得1[発想法、文献調査の方法、プレゼン手法(Google スライド)]		
	クラス内発表 探究学習発表会(引き継ぎ)	探究学習発表会	探究学習発表会
2学期	単元Ⅱ 地域探究 問いの設定、仮説→検証 2市1町フィールドワーク ※探究手法の習得2[インタビュー手法、アンケート手法、]、SDGsについて	単元Ⅲ 未来探究 問いの設定 調査・分析・実践 ※文献調査	単元Ⅳ 卒業論文 論文の書き方 論文集作成
3学期	発表準備、リハーサル	発表準備、リハーサル	ふりかえり 後輩の指導
	ゼミ内中間発表	ゼミ内中間発表	
	ふりかえり	ふりかえり	

○7月20日実施「探究学習発表会」代表発表テーマ

3年次生(個人探究)

ゼミ	テーマ	発表者
健康	スラックラインを広めるには	高本 千寛
教育	新しい子育てのあり方	恵美 まりん
歴史文化	弟の不登校 脱出大作戦～☆	林 暁娘
ビジネス	なぜディズニーのキャストはゲストを笑顔にできるのか	橋本 真名佳
自然科学	海のごみを減らすには	石野 謙

2年次生(グループ探究)

ゼミ	テーマ	発表者
健康②A	患者と高齢者・障がい者が幸せに暮らすために、今 自分たちにできること	重永 丸山 宮本
教育②	②和気閑谷高校の魅力を発信しよう(全国募集に生かそう)	井上 大谷 佐野 高山 谷口 前田
歴史文化②	プロジェクションマッピングを使って、何ができるか考える。	赤木 大森 草加 小林 坪田 松尾
ビジネス③B	具体的な観光プランを考えて、実践しよう。	大平 西村 松田 福田谷
自然科学③	使われていない放棄地を何かに生かそう!	島津 嶺宮 西田 藤元 松本 森

○単元Ⅱ「地域探究(グループ探究)」2年次から1年次に引き継いだテーマ

ゼミ	2年担当	チーム(テーマ)	引継ぎ	1年担当	グループ	目的	内容	協力者
健康	荒金	①小学生の心身の健康をUPしよう。	→	植田	小学生スポーツ交流	体力向上	スポーツ交流	本荘小児童クラブ
教育	松嶋	①小中学生に論語を広めよう!	→	浮田	論語出前	論語普及	論語かるた他	旧閑谷学校
	木下	②和気閑谷高校の魅力を発信しよう(全国募集に生かそう)	→	岡本	全国募集・PR	魅力発信	みらい留学PR他	教頭
歴史・文化	下垣	①大國家の保存修復作業に参加しながら活用方法を考える。	→	西田	大國家	文化保存	改修PR/活用方法	和気町教育委員会
ビジネス	和気	①備前焼を盛り上げる方法を考え、実施する。	→	福田こ	備前焼	産業活性化	新しい備前焼の開発	備前焼作家
	柴谷	②梅村さんちをカフェにしよう!	→	吉山	古民家カフェ	資源活用	古民家改修	古民家カフェ店主
自然科学	佐倉	①校内のビオトープを発展させ、活用しよう。	→	長谷川	ビオトープ	自然理解	維持・発展	自然保護センター
	福田幸	③使われていない放棄地を何かに生かそう!	→	清水	耕作放棄地	自然活用	活用方法	和気町役場

(2) 単元 I 探究基礎 1年次前期

●目的・目標

自らの興味や問題意識に沿って地域を調べ、当事者性意識を持つ。

○グループ活動、探究の手法を学び、活用できる。

○探究活動を通して、自他への想像力、学校や地域と自己のつながりを感じとれる。

●内容

(ア) 取組概要

単元 I では、地域への興味・関心を引き出すことと、情報活用能力を育成することをねらいとして「2市1町ウィキペディア」の作成を行う。作成していく過程で、探究技法を習得する。

(イ) スケジュール

4月	オリエンテーション	・ 閑谷學とは	閑谷學全体の説明、3年間の成長イメージの共有
	「和気・備前・赤磐を知る」 ／ Chromebook 活用方法	・ 2市1町バスツアー(半日) ・ バスツアーまとめ、発表、振り返り	
5月	「2市1町ウィキペディア」 作成 ／ 探究技法の 習得	・ ウィキペディアとは	・ 情報リテラシー
		・ テーマ決め	・ 発想法 (マインドマップ、Google ジャムボード)
・ 調査		・ 文献調査、情報収集	
・ 2市1町ウィキペディアの作成		・ まとめ: 文章表現 (Google ドキュメント)	
6月	・ プレゼン評価の観点／ スライド作成	・ 発表練習→先生からの フィードバック	・ まとめ: プレゼン表現 (Google スライド)
			・ 発表方法
7月	※ 単元ごとに振り返り		・ 振り返り (Google フォーム)
	・ クラス内発表、振り返り		

(ウ) 2市1町バスツアー

1 実施日 令和3年4月19日(月) 午前

2 目的

- ・ 閑谷學のフィールドとなる 2 市 1 町を知る（地域の全体像を俯瞰するために、バスで広域を移動しながら解説を聞く）
- ・ 1 年次の最初の単元「ウィキペディア作成」に向け、調べたい項目に出会う（ツアーの中で興味を持ったことについてまとめ、クラス内発表を行うことで、自分が行かなかった場所についての情報も得る）
- ・ 地域を見るときに切り口に出会う（各ツアーのなかで、閑谷學のゼミ「健康」「ビジネス」「自然科学」「歴史文化」「教育」のうち 2～3 の要素が入るのが理想的。また見る、知るだけでなく地域の魅力的な人と対話をする）

3 コース内容とガイド

【備前市コース】 ガイド：備前市観光ボランティアガイド協会・片山氏
学校出発～たぬき山展望台～頭島漁協～伊部南大窯跡（昼食）～閑谷学校

【赤磐市コース】 ガイド：赤磐市役所・直原氏、地域おこし協力隊・高木氏、上村氏
学校出発～宗形神社～岡山レース工場～熊山英国庭園（昼食）～閑谷学校

【和気町コース】 ガイド：和気町社会教育課・森元氏

学校出発～田原井堰～片鉄ロマン街道～佐伯ロマンツェ～和気神社（昼食）～閑谷学校

●検証（取組による成果と課題）

○ 2 市 1 町バスツアーについて

- ・ 昨年度ウィキペディア作成の取組をしたが、生徒は地域のことをあまり知らないため、活動に対する意欲を持ちにくかった。バスツアーでは実際に地域のことを見聞きすることにより、その後の活動に興味を持つことができた。
- ・ 3 コースの内容を生徒同士が発表によって共有することで、短時間で 3 つの地域について興味を持つきっかけとなった。
- ・ 市町の産学官連携部会委員の方にツアープランの考案とガイドの手配を依頼し、地域と学校のニーズに合ったツアーを組み立てることができた。

○ 2 市 1 町ウィキペディア作成について

- ・ 今年度 1 年次生より Chromebook を導入し、昨年度入学生までの iPad と比較して入力作業が容易にできるようになった。調べた情報のまとめ、発表資料の作成、振り返りの入力等、積極的に Chromebook の活用場面を増やし、生徒も次第に使い慣れていった。
- ・ この取組は実際にウィキペディアに掲載することが目的ではない。完成した作品は本校で文化祭や保護者懇談の際に展示し、お互いの作品を見合う機会をつくった。
- ・ 生徒は情報収集の際に情報の正確性について深く考えることができた。また、情報を他者にわかりやすく伝える難しさも体験した。これまで、疑問に思ったことも調べずそのままにすることがあった生徒も、一つのことを深く調べることができ達成感を味わった。自分が興味を持ったことを調べたので、楽しく調べることができたようだ。

(3) 単元Ⅱ 地域探究（グループ探究） 1年次後期～2年次前期

●目的・目標

地域の課題について問いを立て、実践を通して検証する。

- 選択したテーマの中で、自分たちなりの問い・仮説・探究計画を教員とともに立案し、実践を伴う探究活動ができる。
- 学校内外での体験・探究活動を通して、社会の諸問題と自己及び自己の進路とのつながりを感じとれる。

●内容

(ア) 取組概要

単元Ⅱでは、2年次が1学期に行った地域探究（グループ探究）を、1年次が引き継ぐ形で活動を続けていく。地域の課題を地域の方と一緒に考え、体験し、解決策を提案する。

(イ) スケジュール

8月	・単元Ⅱオリエンテーション	単元Ⅱのスケジュールを確認し、これからやっていくことのイメージを持つ。
9月	・SDGsについて考える	SDGsカードゲーム（チームづくり）
	・2年次生からの引き継ぎ	ゼミごとに2年次生から詳しく引き継ぐ。
	・課題設定（＝合意形成）	Need（地域からの要望、先輩から引き継いだこと）、Will（テーマの中で関心があること、やりたいこと）、Can（実現可能性がありそうなこと）から課題設定をする。
10月	・調査計画 ・調査手法	・計画立案 ・インタビュー手法について
	・フィールドワーク	インタビューの実施、情報の収集
11月	・フィールドワーク振り返り	情報の整理
	・探究活動	実践
12月	・振り返り ・冬期課題	2学期の振り返り
1月	・中間発表準備	今年度は文科省事業の「学習成果発表会」で、全員が中間報告を発表した。
2月	・中間発表 ・振り返り	
3月 ～ 6月	・探究活動 ・まとめ、発表準備	各グループの実践を引き続き行うとともに、7月の探究学習発表会に向けて発表スライドや発表原稿を作成していく。
7月	・探究学習発表会（引き継ぎ会）	グループ探究の総まとめとして、1年次生への引き継ぎも兼ねて全校を対象に発表を行う。

(ウ) フィールドワーク

1 実施日 令和3年10月29日(金)午後

2 目的

閑谷學の単元Ⅱ「グループ探究」を始めるにあたり、探究基礎として学んだインタビュー手法を実践する場として、探究グループごとに地域の施設等を訪れて関係者へのインタビューを実施し、地域のことに興味・関心を持ち、グループの探究課題を深める。

3 行き先等

ゼミ	探究グループ	生徒数	教員	行き先	移動手段
健康	小学生スポーツ交流	11	植田	本荘小学校児童クラブ(和気町)	徒歩
教育	全国募集・PR	10	岡本	小学生スポーツ交流、大國家、古民家カフェ、備前焼、耕作放棄地の5カ所に分散する	
教育	論語出前	9	安東	旧閑谷学校(備前市)	タクシー
歴史文化	大國家	10	西田	歴史民俗資料館→大國家(和気町)	バス
ビジネス	古民家カフェ	11	吉山	梅村邸(和気町)	
ビジネス	備前焼	10	福田こ	宝山窯(備前市)	タクシー
自然科学	耕作放棄地	10	清水	町役場→耕作放棄地(和気町)	徒歩
自然科学	ビオトープ	11	長谷川	岡山県自然保護センター(和気町)	タクシー

●検証(取組による成果と課題)

・毎時間 Chromebook を活用し、Google ドキュメントや Google スプレッドシート等を用いて、グループで共同編集を行った。授業時間外でも必要に応じて Google クラウドルームを活用し、情報共有ができた。共同編集の場面では、司会と記録を決め、順番に役割を回していくことも行った。グループ活動の場面では「グランドルール」を示し、全員が活動に参加できるように促した。

「閑谷學・グループ探究のグランドルール」

- ①積極的全員参加(自分ごと化) ②常に探究目的を振り返る ③発言者に傾聴の姿勢
④マイナス発言をしない ⑤「怒」の心

・グループ探究のテーマが決まっており、外部の方も積極的に関わってくださっていると、生徒の主体性の部分が欠け、指示を待つのみのもこと見受けられる。決められたテーマの中でも、自分たちの提案を考えて、実践・検証、まとめる(提言や成果物として)ことを今後期待する。一度の探究サイクル(課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現)で終わらず、新たな疑問を発見し何度もサイクルを繰り返してほしい。

(4) 単元Ⅲ 未来探究（個人探究） 2年次後期～3年次前期

●目的・目標

これまでの学習経験を個々人の問題意識に沿って発展させる。

○自己に深く根差すテーマを設定し、問いを立てることができる。

○自己あるいは社会のより良い未来をつくるための探究計画を立案し実行できる。

●内容

(ア) 取組概要

単元Ⅲでは、単元Ⅱまでで学習してきたことを活かして個人で探究活動をする。はじめに9月10月で問いを設定し、12月まではクラス単位、1月以降はゼミ単位で探究サイクルを回す。その後、7月に探究学習発表会を終えて単元Ⅳ卒業論文につなげていく。

これまでの活動から、問いの設定が非常に重要であり、“問いのテーマが狭すぎると内容が深堀出来ない”、“調べればすぐに分かる問いになっている”などの課題が挙げられていた。そこで、本年度は問いの設定に重きを置き、自分の関心と社会・地域の課題とを繋いだ問いを設定できるような活動を取り入れた。具体的には、まず自分の関心のあることを多数挙げる活動を行い、次に新聞やニュース、地方紙などを用いて課題を調べ、それらを自分の関心のあることを用いて解決する方法を考えるという活動をした。また、クラス担任との面談や、生徒同士の対話で様々な視点の意見が得られるように、ゼミに分かれての探究を例年より後に設定したり、ミニ発表会を設けたりした。

(イ) スケジュール

8月	単元Ⅲオリエンテーション	単元Ⅲのスケジュールを確認し、これからやっていくことのイメージを持つ。
9月	インプット	教員の大学での研究や高校生全国探究コンテストの作品を聞き、探究しようとしたきっかけや探究方法などを学び、探究のイメージを持つ。
10月	問いの設定	問いの設定に向けて、自分の関心を洗い出す。(My Will List 100) また、SDGsの視点から地域や社会の課題を調べる。それらの関心と課題を組み合わせ、マインドマップやマンダラートといった発想法を使いながら問いを設定する。
11月	探究サイクルを回す	設定した問いについて、「情報の収集(実践)」

		「整理・分析」「まとめ・表現」の探究サイクルを生徒自身で回してみる。
12月	ミニ発表会	一か月間の探究結果を6～8名のグループで発表し合う。似た問いのテーマごとにグループ分けをすることで、自分の探究の参考にしたり、他の生徒からのフィードバックをもらったり新しい気づきを得る。
1月	探究サイクルを回す（2回目） ゼミ決定	ミニ発表会を経て、得たフィードバックから問いの再設定（修正）をする。また、決定した問いからゼミに分けて探究する。
2月	中間発表	2度探究サイクルを回した単元Ⅲのまとめとして発表する。これまでの探究を整理して見直しを持たせる。
3月	振り返り	単元Ⅲの活動を振り返り、単元Ⅳ 卒業論文に向けて探究サイクルを回す（計画する）。
4月 5月 6月	探究サイクルを回す（3回目） 発表準備	各個人の経験や実践を引き続き行うとともに、7月の探究学習発表会に向けて発表スライドや発表原稿を作成していく。
7月	探究学習発表会	単元Ⅲで行ってきた個人探究の総まとめであり、単元Ⅳ論文執筆の準備として全校を対象に発表を行う。

●検証（取組による成果と課題）

問いの設定の際に、社会や地域の課題を意識した活動を行ったことにより、生徒の中に“解決する”という視点が生まれた。その結果、課題の一つに挙げた“調べればすぐに分かる問いになっている”という問いを設定する生徒が余り見られなくなった。また、発表機会を増やしたことにより、目的意識を持って活動を行えたり、発表準備を挟むことで活動を整理したりできた。

一方で、自由に問いを設定しているので一人一人に沿った指導が困難である。教員の生徒個々に対する指導力も必要であり、さらに生徒が課題解決に慣れていて一人で探究サイクルを回せることが必要なので、教員生徒ともに困惑する場面がよく見られた。

以上のことを踏まえ、一度枠組みの中での問いの設定を経験し、その探究活動の中で、教員は声掛けなどの指導力の向上を行い、生徒は課題解決の考え方や技術を習得してから、それぞれが自由に問いを設定して探究を進める必要がある。

(5) 単元Ⅳ 卒業論文 3年次後期

●目的・目標

個人探究を論文として言語化する過程で、社会における自己のあり方生き方についての考えを深める。

○3年間の自己の成長をふりかえり、前向きな次のステージへの移行準備ができています。

●内容

(ア) 取組概要

単元Ⅳでは、3年次後半（2学期以降）を、2,000字以上の論文をまとめる期間とし、調べてまとめて終わりではなく、調べた中から新たな疑問を持ち、さらに調べていくといった深まりを持たせる。また、調べる方法もネットや身近な人に聞くだけでなく、文献調査や地域に出て活動することを勧める。探究の内容が進路決定や卒業後の進路先でも役立てられるようなものにする。すでに進路が決まった生徒は、閑谷學で取り組んでいる課題発見から解決方法の探究が進路先で役立つこと意識させる。

<「自走できるようになる」ためにつけたい力>

- ・自己の将来について夢や希望を持って具体的に考えようとする態度
- ・異なる意見や他者を受け入れ、相互に認め合うことを通じて、共同して課題を解決しようとする態度
- ・社会を取り巻く様々な事柄に目を向け探究することを通じて、自分の言葉で整理しようとする態度
- ・「閑谷学校」の精神を継承しようとする姿勢

(イ) スケジュール

8月	夏休み課題	自分の発表までの内容をまとめ500字の序論を作成させる。
9月	論文指導 論文作成	論文の書き方指導を各クラスで行い、序論の修正をさせ2,000字の卒業論文に取り組む。
10月	論文提出	個々の進捗度を確認しながら論文を完成させ提出(中間提出)
11月	論文修正・完成	提出後、教員が添削を行い論文の修正を行い完成させる。
12月	振り返り	1年間の振り返りを行う。
1月	後輩の指導	2年生の希望者に対してアドバイスをする。

(ウ) 論文作成

- ①自分で立てた問いに対して、一つの明確な答えを主張し、その主張を論理的に裏付けるための事実に、理論的な根拠を提示して主張を2,000字で論証する。

- ② 1・2年次で学んだ問題把握や情報収集能力を活かしながら、自分の主張を明確にし、それを伝える。

構成

「タイトル」 3年〇組 氏名			
1. 探究動機	なぜそのテーマで探究しようと思ったのか	300字程度	2,000字以上
2. 探究手法	どのように探究したのか	200字程度	
3. 探究結果	探究した結果何が分かったのか	残りの字数	
4. 結論	探究結果より、目指す自分と社会の姿とは何か	700字程度	
※参考文献	調べた書籍名やサイト名を記載する		
※協力者	インタビューなど調査にご協力いただいた方の所属と名前を記載する		
※図やグラフ等を論文中に入れて内容の補足することは可			

●検証（取組による成果と課題）

1年次生と2年次生の1学期までグループでの探究活動を行った。1年次生では人間関係が希薄な状態でのグループ活動ではあったが、戸惑いながら協力して調べ、まとめて発表するという経験をすることができた。2年次生2学期より自分の進路に関わる個人探究に取り組んだ。将来の進路について真剣に考え閑谷學を進めるにつれて自分の考えの甘さを実感した生徒、将来の進路を本当に目指そうと思う気持ちが芽生えた生徒など個人差はあるが一定の成果があり、探究学習を深めることができた。最後の発表会では探究したことを分かりやすく伝える工夫や、態度などが向上し、1年次生からの成長を感じることができた。

2年次生4月よりコロナ禍の影響で、外部への聞き取り調査、体験などが制限され、思うように資料を集める活動に時間を当てられなく探究を深めることができなかつた。また3年次生の2学期の後半からは、もう一歩進めて次の探究を考えていたが、その取組には至らなかつたことが反省点である。

今後、探究活動の中心である実体験が制限されることを想定した場合、それに変わる活動を模索する必要があるのではないかと感じた。

4 各教科・科目等と連動する課外活動

(1) ボランティア・地域との交流

生徒会活動（皿回しから学ぶリーダー論）				8月3日
参加生徒	22人	参加教員	1人	
<p>・内容 桜が丘中学校で開催されたリーダー研修会の中で、皿回しから学ぶリーダー論を本校生徒のファシリテートで実施した。皿回しを通して、自然とアイスブレイクをすることもでき、先に体験をしたことに紐づけて、リーダーに求められる資質や行動を学ぶことで、中学生にも新たなものの見方を学んでいただけたのではないかと。</p> <p>・成果 真剣に話を聞いてくれる中学生の姿から、高校生も刺激を受け、運営側の責任や、高校生としての在り方を見つめ直す機会にもつながった。</p>				

放課後学習支援				5月～3月
参加生徒	20人程度	参加教員	2人	 
<p>・内容 和気中学校、佐伯中学校へ定期的に放課後学習支援にいき、中学生に教えることで自分の学びを深めることができる。</p> <p>・和気中学校 6月から月1～2回程度</p> <p>・佐伯中学校 5月から月1回程度</p> <p>計13回</p> <p>新型コロナウイルスの影響で回数や人数は制限があったが、毎回、4～6名程度が参加している。</p> <p>・成果 中学生にとっては学習の理解が深まるだけでなく、高校生にとって気づきが多く、教えることで自らの学びが深まり、教える立場を体験することで違う観点で考えることができ、成長に繋がっている。</p>				

バンクギャラリー				10月～2月
参加生徒	5人	参加教員	1人	 
<p>・ 目的 地域の方と一緒に街づくりに参加することで参画意識を高める。</p> <p>・ 協力 井方 克明 氏 (和気町地域おこし協力隊)</p> <p>・ 内容 元銀行を改装して交流の場所をととして活用している建物の金庫を一緒にリニューアルし、ギャラリーとして活用させる。(ペンキ塗り、ピクチャーレール付け、展示)そして、地域の方や高校生の活用を促し、地域の交流の場とする。</p> <p>・ 成果 自分たちが関わることで地元へ愛着が沸き、自分たちで何かしようという気持ちが芽生えてきた。</p>				

English Fes 2021				8月6日
参加生徒	20人	地域関係者	27人	  
<p>・ 目的 ①児童・生徒が英語への興味関心を高める。 ②地域内の縦のつながりを生成する。 など</p> <p>・ 場所 岡山県青少年教育センター閑谷学校</p> <p>・ 参加者 町内小中学生/和気高生/大学生/県内 ALT</p> <p>・ 主催 和気町教育委員会</p> <p>・ 内容 巨大すごろく(国旗ゲームなどのミニゲーム)や『つながり』をテーマにしたアート作り、外国の歌の合唱など、9時間に及ぶイベントも、終了に近づくにつれて賑やかになっていった。終了後には、参加者から「年齢国籍関係なく楽しく遊ぶことができると気づいた」「もっといろんな人と交流をして『つながり』を感じていきたい」などの声があった。</p> <p>・ 成果 ほぼ全ての企画・準備・運営を行った英語研究部を主体とした生徒は、企画力・実行力・計画性などを養い、また、事前のシミュレーションを十分に反復することで、本番に気配りや配慮の余裕を持つことができると実感した経験となったようだ。</p>				

和気駅前イルミネーション				9月下旬～11月20日
参加生徒	51人	地域関係者	275人	  
<p>・目的 世代を超えて共に地域の活性化の一端を担うことで、子どもたちの地域への誇りや愛着を育む。</p> <p>・協働体制 和気町本荘地区まちづくり協議会(約20名)・和気町立本荘小学校(全校生徒251名)・和気閑谷高校イルミネーション実行委員会(51名)</p> <p>・内容 本荘小児童への説明動画の作成・イルミネーションデザイン(ベンチイルミネーション2点と空中イルミネーションの3点)とその制作・設置・点灯を行った。テーマは『コロナによって失われている大切なもの』。</p> <p>・成果 終了後、大人からは、「若い新しいアイデアを得られた」「高校生の頑張りに励まされた」「小学生・高校生と地域こぞって協働できたことが嬉しい」などの声があった。生徒たちは小学生や大人たちとの関わりをとおして、状況把握能力や柔軟性・社交性や主体性といった”人と関わる上で大切な力”を身につけた。子どもも大人も同じ思いになって、作り上げることができた。</p>				

ワケタウンシネマ				10月3日
参加生徒	7人	地域関係者	3人(観客260人)	 
<p>・目的 地域で開催される行事に、お手伝いではなくスタッフとして参加することで、実行力や協働する力を身につける。また達成感や人と関わる喜びを味わう。</p> <p>・内容 6月から、和気町の有志による親子向け野外映画会に中高生実行委員として参加し、上映作品の選定、チラシ作成、スポンサー紹介動画の作成、当日の運営(会場設営、受付、和気町物産の販売、子ども向けサービス提供)を行った。上映前には「商品開発」履修生がガチャガチャのCMを流し商品紹介を行った。</p> <p>・成果 事前準備では、動画制作や映画会のキャッチフレーズの提案において、本校生がリードし、中学生実行委員に対しても優しく働きかける姿を見ることができた。高校生がスタッフとして働く姿は、参加者にも、まちの活気として映るとの声があった。</p>				

聞き書き				R 3.3月～R 4.3月
参加生徒	8人	地域関係者	7人	
<p>・ 目的 人生の先輩方の話を聞き取ることで、コミュニケーション能力を身につけるとともに、今後の進路に対する視野を広げ、キャリア観の育成を目指す。</p> <p>・ 内容 昨年度3月上旬、「聞き書き」の取組を本校における持続可能な取組とするため、2・3年次生の先輩から、「聞き書き」のノウハウを伝達していく研修会を行った。更に、3月中旬には、「聞き書き」を依頼する際での電話対応実践など、「備中『聞き書き』実行委員会、森光康恵氏に具体的な事例などを交えながらのご指導をいただいた。また、本校の下垣豪教諭が、ハンセン病の歴史などを踏まえた人権学習を実施した。</p> <p>以上のような研修をとおし、昨年度3月末、1年次生1名の生徒が、国立療養所長島愛生園（瀬戸内市）で「聞き書き」の実践を行った。今年度の取組は、和気町教育委員会とも連携を図り、地域の方への「聞き書き」の実践を行った。長島愛生園の実践も含め、お聞きした内容を書き起こし、その構成を整えた。今年度末までには、冊子にまとめていく予定である。</p> <p>・ 成果 このような取組をとおし、話し手の様々な思い、考え、生き様に触れる中で、生徒自身の心が豊かになり、また、生徒個々のキャリア観の育成にもつながっていったように思う。来年度は、この取組を、本校生徒をはじめ、近隣の中学生など、多くの人を巻き込み、地域連携をより強固なものにしていきたいと考えている。</p>				 

姉妹校交流＜韓国・昌原龍湖高等学校＞				12月16日
参加生徒	21人	参加教員	4人	 
<p>・目的 国際交流を通じて他国の情報や文化を知り、グローバル人材への成長の契機とする</p> <p>・内容 新型コロナウイルスの影響で今年度も直接の交流会を断念し、オンラインでの交流会の実施となった。内容に関しては学校紹介、文化紹介、両校の取り組み紹介（本校は論語について）、クイズ大会（本校は岡山県について）を互いに披露した。生徒たちは交流用のスライドを作成し、韓国語ですべて交流会を実施した。10月より岡山韓国教育院のナム・キョロク先生を招聘し、毎週木曜日の放課後に韓国語講座を受講してきた。</p> <p>・成果 韓国の生徒も交流会をすべて日本語で対応してくるなど、努力の様子が見られ、本校の生徒が自らと比較し、考える部分が多かった。国籍を越えて人同士が一つになる重要性に気づいてくれた。</p>				

姉妹校交流＜台湾・国立屏東高級中学校＞				12月17日
参加生徒	40人	参加教員	7人	 
<p>・目的 異文化理解を深め、英語学習への意欲を向上させること。姉妹校との交流を深めること。</p> <p>・テーマ 『Let's be friends！（友達になろう！）』</p> <p>・内容 和気高生10名・相手校30名で行われた。アイスブレイクに、自己紹介と自国特有のゲームを互いに紹介しておこない、メインプログラムには、相手校生徒の興味関心に合わせた自国の「旅行プラン」を立て合った。本校の英語研究部が企画準備を行い、会話はすべて英語で行われた。</p> <p>・成果 相手校の英語能力の高さに驚き、英語学習への意欲が向上したようである。最後には「友達になろう！」と互いに呼びかけ合っていた。部活動としては、状況を的確に捉えて声を発し場を和ませるなどの先輩らの柔軟な対応やその姿を見て、目指したい人間像となったようである。</p>				

(2) 他校・他地域主催イベントへの参加

全国募集に係る取組<地域みらい留学ほか>				6月～12月
参加生徒	20人程度	参加教員	7人	
<p>・内容 月1回のオンラインイベント「地域みらい留学」に参加（6月～10月の土日、計6回）</p> <p>学校の様子を生徒の言葉でアピールした。自分の学校の特徴を理解し、発信を行った。全国へ向けて、地域の特徴や本校の地域をフィールドとした学び（「閑谷學」や「地域協働探究」のような地域密着型の学び）についてプレゼンした。</p> <p>・成果 この他に閑谷學の「全国募集ゼミ」において、インスタ投稿や動画作成をしてアップをするなど、生徒自らが発信している。</p>				

被災地に学ぶ				10月18日、11月27日、12月28日
参加生徒	3人	参加教員	1人	
<p>・目的 災害の少ない岡山でも、防災について自分事として考え、自ら考えて行動できるようになる。</p> <p>・内容 岡山の防災に興味ある高校生が集まり、事前交流会で思いを共有し、そして、宮城県亘理高等学校の生徒と一緒にオンラインで被災遺構の見学をし、ワークショップを通して、被災体験や被災の現状を知り、高校生に何ができるか考える。複数回の事前事後の交流を行うことで、継続的に防災について高校生目線で活動するきっかけとする。</p> <p>・成果 オンラインではあるが、実際に震災遺構を見学し、現地の高校生の思いを共有することで自分事として捉えることができた。また、防災について伝えることを行動に移し、県のフォーラムで発表し、継続して活動を行っている。</p>				
				
				

全国高校生まちづくりサミット 2021 in 尼崎				8月18日～20日
参加生徒	6人	参加教員	1人	 
<p>・目的 他県の高校生のまちづくりの取組を参考に自分たちの取組を見直す</p> <p>・テーマ 『高校生が考えるまちづくり！』</p> <p>・内容 それぞれの地域や町の魅力について発表し、互いの地域づくりを理解し、参考にする。また、交流会を通して県を超えて繋がりができることで今後の活動の参考にする。</p> <p>・成果 これまで気がつかなかった地域の魅力に気づき、他地域の取組を知ることで参考にすることが多かった。自分たちの活動を考えることができた。</p>				

若手官僚×高校生「日本の“未来”について語る会」 ＜三重県立紀南高校＞				6月25日
参加生徒	2人	参加教員	2人	
<p>・目的 公務員志望者を含む生徒が、大人や他校生と意見交換し、視野を広げてもらう。</p> <p>・内容 若手の官僚の2人と、地方創生に精力的に取り組む高校生のオンライン意見交流会で、三重県立紀南高校の小野先生が企画した。高校生は紀南、飯南（三重）、小国（山形）、島田商業（静岡）、郡上北（岐阜）、三崎（愛媛）、飯野（宮崎）から参加。紀南高校の生徒が進行役となって40分×2回のセッションが行われた。</p> <p>・成果 事前課題として、官僚への質問事項を提出しており、「地域活性化は本当に日本のためになっているのか？」といったことについても率直な意見交換があった。会が終わった後も各グループで話し合いが続き、参加生徒の積極的な参加姿勢がみられた。</p>				